

平成30年度 第2回豊田市生涯学習審議会 会議録

- 日 時 平成31年2月8日(金) 午後1時～午後3時
 - 場 所 市役所東庁舎6階 東65会議室
 - 出席者 [豊田市生涯学習審議会委員] (敬称略)
小木口祐子、加納勝彦、坂本耕二、杉山浩子、鈴木覚、鈴木正和、土井幸治
中田繁美、西原香保里、牧野篤、湊裕、山村史子
 - 事務局 生涯活躍部 辻邦恵
市民活躍支援課 勝野二徹、松井俊幸、宮川恭子
-

次第

- 1 開会
- 2 会長あいさつ
- 3 議事
豊田市の高齢者の活躍支援について
- 4 生涯活躍部副部長あいさつ
- 5 閉会

- 開会
- 会長あいさつ

- 議事 豊田市の高齢者の活躍支援について
 - 事務局 資料に基づいて説明

【 委員意見 】 (要約)

- | | |
|-------|--|
| ○A 委員 | <p>高齢者の社会参加の支援について、就労をベースに資料が作成されている。はじめに、アンケートの結果について、御意見や御質問があればお願いしたい。全国的に、企業の定年延長に伴い、自治会の担い手がいなくなっている状況であり、従来の地域運営の仕組みとの矛盾が起きている。</p> |
| ○B 委員 | <p>アンケート結果のうち、市民活動・地域活動への参加意欲について、「条件によっては参加したい」と回答する人が多いが、その条件の内容に踏み込まないとわからない。</p> <p>有償であれば参加したいのか、仕事を持ちながらでも負担にならない程度であれば参加したいのか、現状はそういった条件を考慮できるような仕組みになっておらず、結果的に役員のなり手がいないという状況になっている。</p> <p>また、山村部では役員のなり手がいないために、今の役員の負担が重くなっている状況であり、高齢者の活躍支援を考えるにあたり、「地域で役割の多い山村部ではなく、主に都市部に住む高齢者」と、分けてしまうのは残念だと思う。</p> |
| ○C 委員 | <p>条件は人それぞれだと思う。ヒアリング等を行って、その条件を分析して、クリアできるように整理できるといい。</p> <p>高齢者の活躍を生かしたい分野である次世代育成の取組も、交流館で既に行っているため、周知を含め、それぞれの地域のニーズをとらえながら進めていく必要がある。</p> |
| ○D 委員 | <p>交流館事業の傾向として、定期的で開催されるカフェやサロンが多くなってきており、講座というより、ロビーなどの広いスペースで自由に企画を持ち寄る緩やかな形で開催され、その担い手の多くがシニアの方である。</p> <p>仲間も巻き込みながら、それぞれに工夫を凝らし、会場運営などに尽力していただいており、高齢者の方が気軽に活躍できる場だと感じている。</p> <p>交流館としては、地域の方が自主的にやっていくようにしたいが、地域の方の反応は積極的、主体的になると、二の足を踏まれる方が多い。ボランティア募集には来ないが、逆に人づてで紹介されて始まった活動は長く続く傾向がある。</p> <p>しかし、どこかで貢献したい、社会の役に立てる場所を求めているということは感じるため、交流館はいろいろな人をつなぐ結び役を務めたいと思っている。</p> |

- また、高齢者の方は、人を引っ張ることができると感じる。
- A 委員 責任は負いたくないが、活動はしたいということ。
- E 委員 前回の審議会よりも、ずいぶん就労に特化した内容となっているが。
- 事務局 資料の内容は就労寄りになっているが、高齢者の活躍の形を就労に限っているわけではないため、フラットな意見を欲しい。
- A 委員 アンケートで老後の働き方について聞いているが、就労者・非就労者の男女別、年齢別の内訳はあるか。全ての年代で同じ傾向があるか。
- 事務局 データを再分析する。
- F 委員 60代は仕事に対して、ネガティブな思いを持っていると思う。
数字に追われない気軽な仕事は、軽作業や雑用になる傾向があるが、もっと楽しい仕事があるはずである。
「就労を通じて社会貢献」と言わずに、就労すること自体が社会貢献としたほうがいい。
- A 委員 高齢者のニーズはあまり変わっていないと思う。父も定年退職した直後は「もう働きたくない」と言っていたが、3年ほど過ぎたあとにまた働き始めた。
全国的にはポスト工業社会と言われているが、豊田市は製造業がしっかりしているため、まだ工業社会である。市民自身が主体的にやらなくても、地域社会ができてしまう状況である。
- 事務局 豊田市も数年後には裕福ではなくなる。切り替えるタイミングだと思っている。
- C 委員 AIが発達すると、今の仕事の50%がなくなると言われている。
若者も働き口がなくなるかもしれないのに、まして高齢者にどのような働き方があるのか。
人手不足と言われているのに、雇用しないのはなぜなのか。高齢者より外国人の雇用になっている。
産業構造の変化はあるが、高齢者が疎外感を感じないようにしなければいけない。
- G 委員 今回のテーマである高齢者の活躍支援について、今の60代～70代を想定しているのか、団塊ジュニアが高齢者となる2040年を想定しているのか。
今の70代をターゲットとすると、厚生年金や企業年金といった収入源がしっ

かりしている。

毎年、福祉センターで行われている確定申告会場は非常に混雑している。年金収入だけであれば、確定申告はいらぬため、年金以外の収入がある人が豊田市には大勢いると実感している。

一方で、日々の生活を送るための現金が必要な方もおり、格差がある。

今回のテーマは、どちらに焦点を当てるのか、明確にする必要がある。

●事務局

生きがいのある豊かな高齢期の生活を送るための支援を考えたい。就労については、産業、福祉の面があるが、高齢期にも楽しく働きたくなるような仕組みを考えたい。

○A 委員

今の60代、70代や団塊ジュニアという御意見があったが、その下の世代まで伸ばして考えなければいけないと思う。

今の小学校6年生の平均寿命は107歳になると言われている。子どもをターゲットとしつつ、今の高齢者が活躍して、次の世代、孫の世代と関わることで生き生きしていく。

2040年には、人工知能が人間の知能を超えと言われている。「東ロボくん」という東京大学合格を目指して人工知能を作った。東大には受からなかったが、偏差値60程度の大学ならば合格できるレベルである。

人工知能の精度が上がれば、今のホワイトカラーの8割が仕事を失う可能性があると言われている。自分で人生を設計しないと生きていけなくなる。

子どもの貧困が浸透しており、6人に1人が可処分所得122万円以下の貧困と言われている。一人親世帯の場合、政府発表では52%、厚生労働省発表では80%が貧困であるとされている。

広島県の廿日市市で、学力支援の一環として、朝食を学校が提供するという取組がされている。また、子ども食堂も全国で2,300か所あるが、伸び悩んでいる状況である。貧乏人の子もだと言われるので利用しにくいという面がある。

次の世代と関わりながら、高齢社会をどうしていくかということである。豊田市も財政的に困った状態になっても、過去と同じ要求が来てしまう。財政的に軽くなる仕組み、さらに楽しくやっていける仕組みを考えていかなければいけない。

○H 委員

時代の変化のスピードが速いと感じる。今、実際に起きている状況として、変わっていく時代に合わせて、変わるための業務が付加されて非常に忙しい。人手不足感がある。一方で、トヨタグループでは定年延長については慎重である。

年功序列の賃金体系の中で、ホワイトカラーは7万人のうち2万人、残りはブルーカラーである。昔ほど身体が動かないのに、年功序列で給料が高いという課題がある。

十数年、高齢者や女性に優しいラインづくりに取り組んできたが、限界がある。視力や反射神経は衰えるため、同じ工程を持つのは難しくなってくる。

AI の活用も一気には来ないであろうから、一時は外国人の力も借りないといけない。

また、足元まで迫っているのは、トヨタ OB で組織している豊寿会の役員のなり手がいないということである。その要因の一つとして、65歳を過ぎても就労しているために断られてしまうということがある。基準を少し緩和して、働いている間でも兼務できるようにしている。

60歳を過ぎたあたりから、地域にも関わってもらような、現役の時から関わりを持ちながら、徐々に移行してもらいたい。地元企業と行政と関わりながら進めることができるといい。

○I 委員 地域での活動には毎回同じ人が出てくる。高齢者クラブも参加していない人には伝わらない。

○J 委員 シルバー人材センター会員のなかでも、お役は基本やりたくない人が多い。
シルバー人材センターで市内28交流館の夜間管理を受けており、約130人が従事している。大半が自動車関連会社のOBの方である。
夜間管理に従事しているある会員は、人と話す仕事に就いてよかった、地域の人や地域の役に就いている人を知ることができたと言われていた。自分は地域デビューという言葉は好きではないが、その方は地域デビューできたと思う。それまで地域との接点がなかったが、先に進まれた。公共性の高い仕事に就いたことにより、シルバーを卒業すると同時にボランティアなどを始められた。

○H 委員 子どもの貧困について、連合愛知ではフードドライブの取組をしており、フードバンクに寄付している。
また、子ども食堂に見学に行こうと申し込むと続いていないところがある。資金面やボランティアの数を確保できないことが原因のようである。メーデーでもフードドライブをやりたいが、供給先がそういった状況では続かない。

○A 委員 子ども食堂ではなく、地域食堂という形で子どもと関わりながら貧困も解消するような方法がいい。子どもが学校に登校する前に、親が出勤し既に行かないことや、夕食にも親がおらず、500円が置いてあるような状況もあり、目に見える貧困ではなく、人間関係の貧困を解消する必要がある。
子どもが見えてくると、NPOも生活支援や学力支援まで関わろうとするが手一杯の状況である。そこで、「働くお母さん支援」として、親も一緒に食べられるように朝ごはんを提供し、親が先に出勤し、子どもは登校時間まで支援者と過ごすといった形もよい。
コンビニなどの廃棄食品の処分費が膨大だとも聞く。仕組みの作り方で解決できることがあると思う。

- I 委員 女性が働けないということはないか。寺部こども園は元保育園であるが、高橋こども園は元幼稚園で15時までの預かりで、各クラス10人程度である。
また、寺部こども園ではボランティアが始業前に子どもを預かってくれる取組もある。
- K 委員 これらの取組の庁内連携はどうなっているのか。
福祉分野の資料が欲しい場合、どうするといいか。
- 事務局 ワーキンググループで共有しており、連携して取り組んでいる。福祉分野の資料についても、後日提供できる。
- K 委員 「女性の働く」について、自分自身も条件が合えば働きたいと思っているが、介護を抱えながらでは難しい。周りでも、孫の面倒を見ないといけなとか、家族として当然だからと言って家にいる女性がいる。男性は、昼食を楽しみに帰宅し、女性はその準備をし、孫を習い事に送っていくなど、家族に尽くしている女性もいる。
共働きで過ごしてきた家庭は、男性も草取りに出てきて、そうすると周りもほめて、本人も喜んで帰っていく。色々なパターンがあるが、ほめ合う、認め合う、みんなで助け合うということが必要だと思う。近所づきあいをしたくても、声をかけにくく、難しいと感じる。
- L 委員 原点はご近所づきあいであると確信している。
「働く」のとらえ方について、常日頃思っているのは、通帳の残高ではなく、「人が動く」ということである。
セカンドライフチャートについて、高齢者クラブを入れていただきたい。
- E 委員 「働く」にシフトしたのが確認したのは、高齢者の活躍支援が「フルに働く」ことになるのかという点を確認したかったためである。
就労と生き方の両方をセットで考えていくべきだと思う。
福祉分野出身であるため、「要介護等になることはだめ」とか「支援する人とされる人の活躍の線引き」ではなく、いろいろな人がその人が持っている部分を生かすという考え方にしたい。
ご近所づきあいなどの目に見えにくいものを社会貢献や就労に埋没させてはいけない。
働く生きがいや楽しみを、収入を得るだけでなくどういう風に形に出していくか。
- A 委員 全国的にはコミュニティが壊れているから、小学校区単位のコミュニティを再生しようという動きがあるが、豊田市は地域も会社もしっかりしている。今、新しい仕組みを作りながら社会が底抜けしないようにする必要がある。

就労が弱いという事務局案ではあるが、生涯活躍部が生涯学習審議会の事務局である。生涯学習があちこちで注目されている。社会教育や生涯学習の分野は、制度ができるほど狭間ができるが、狭間にしないように間をつくる。人のつながりや社会で役立つ、ほめられて喜んで帰るといった相互承認できる環境をどのようにつくり、仕組みに落とし込んでいくか検討したい。

子どもの貧困は、子どもが自分自身で抜け出すことが難しいと言われる。それは子ども自身が「頑張ろう」と思えないからである。ほめられることが家庭でできなければ、地域でする仕組みが必要である。

高齢者もご飯がおいしいと思うと誤嚥が少ないと言われる。味だけではなく、一緒に食べようという関係が大切で、義務的な食事は苦痛である。それは子ども大人も一緒だと思う。

F 委員の言うように、もうこんなに働きたくないという人に、自分が役立つ、認められる仕組みづくりをしていきたい。